
white line

黒崎 達哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

White line

【Nコード】

N1443Z

【作者名】

黒崎 達哉

【あらすじ】

自分の存在に絶望し、世界のつまらなさに失望した少年はある日フラフラと自殺を決心する。

だが、辛くも生き残ってしまった少年はそのまま、空気の様に生きて行くが、ある日少年はある黒い箱と出会う。

その黒い箱は銃や、大砲？

様々な武器を手に入れた主人公、藤原雑人が現実世界で奮闘する話です。

第一話

ドス！

俺の腹に突き刺さるのは上級生の拳。

溝に思い切り入った拳が俺の嗚咽感を増幅させる。

ゲホゲホとむせて、涎を垂れ流したまま無表情で上級生を見つめる。男は、その表情に怒ったのか再度蹴りやらパンチやらを浴びせる。その内の何発かが顔に入り、痛々しい血を吐きながら、地面に倒れこむ。

「おい。顔はやめとけよ。」

上級生の一人が、今まで俺を殴っていた男を嗜める様に言う。

「いいんだよ！こいつはそんぐれーしねーとわかんねーんだよ！」

だが、男は自分の正しさを表現するかのように、もう一度俺の頬を殴る。

「てめえ…次学校来たらどうなるかわかってんだろぅな…？」

そう言って引き返して行く上級生たち。中にはタバコを吸っているものもいて、それが学校にばれたらどうするのか、考えていない頭の悪い奴らだと言う事がわかる。

顔の傷を気にしながらも、俺はカバンを取りに教室に戻る。階段を上がり、一年の教室がある三階に苦労しながら登る。

教室のドアを開けると、放課後なのに教室に残っている生徒が何名かいるらしかった。

俺がドアを開けた音に反応したが、すぐに自分たちの会話に戻る。

この反応でおおよそ、俺のクラスでの立ち位置がわかるところだろう。

カバンを取りに机に向かうと、一人の女子生徒が俺に近づいて来たのがわかる。

「どうしたの？顔…怪我してるよ？」

少女めいた雰囲気はまだ持つ、サイドテールの女の子。

「浅川…？」

口を切ったからか、喋ると痛い。

この童顔の少女のような女子生徒の名前は浅川緑。

その高校生では珍しい顔の整った童顔と、皆に平等に優しい性格で、この高校で人気のある女子生徒である。

「凄い痛そうだよ？保健室行く？」

俺を心配してくれているのか、それとも世間体か、自分の評価を上げるためか、今の俺には気休めをマイナス方向に通り越して、あまりいい気がしない。

「大丈夫だよ…。ちょっと転んだだけだからさ…心配してくれてありがとう。」

俺はまだ何か言いたげな浅川を置いて、教室を早足で出て行く。

昇降口を出ると学校が一見でき、それがまた、俺の心を深く傷付ける様だった。

俺はカバンを肩にもう一度きちんと背負い直すと、家に戻るため歩き始める。

十分程歩いただろうか、いつも通る線路が見えた。俺はそれを見ると無性に気分が良くなった。現実から逃げられる手段を見つけた。

カンカン

踏切のシマシマ模様が静かに降りてくる。

この中に人を入れないためだろう…。

だが、俺はそれが降りて来ても全く気にする事なく、無心で少し汚れた線路を見つめる。

「このまま……死んでしまえば……本当に楽かもしれないな……」

俺は一人そんな事を呟く。

(いや…でもやっぱり死んだら迷惑かけるかもな…)

父さんに母さんに姉ちゃん。

血の繋がっていない俺を、いつも厳しく優しくしてくれた家族の顔が脳裏に浮かぶ。

(でも…もう…無理だよ…)

俺はフラフラとした足取りで、高速で線路に向かってくる、人間倉庫に合わせて線路に降り立つ。越えてはいけない禁忌の白線をおつさりと踏み越えた事に、多少の驚きを感じたが、気にしないで死神を待つ。

圧倒的重量感を持つそれが、俺に目がけて超高速で突進してくる。

(これで……終わりか……)

そして目を柔らかく瞑った俺の身体に衝撃が走る。

だが、それは電車のもものではなかった。

人が俺を抱きしめながら、線路を離脱したのだ。

「あ、危ないじゃん！何してんの!？」

一方的に助けておいてこの喚き様、うざったいっただらありゃしな

い。
俺は喚きたつ女を見ながら、盛大に転けた事で擦りむき、血を流す腕を無表情で抑える。

「ありがと。」

まだまだ言い足りないといった感じの女は俺の礼の言葉と、腕の傷に喉が詰まった様だ。

「れ、礼はいいから、どうしてあんな事したの!？」

この女は他人でありながら俺の事を気にしているのか、全く無駄な偽善精神だ。

反吐と一緒に、心臓まで吐き出したい気分の俺は、女の質問を無視して、おぼつかない足取りで立ち上がる。

身体を反転させて家の方向に歩き始める。
取り残された女が……いや、取り残されていない。俺に着いて来ている。

「何無視してんの!質問に答えなさいよ!」

流石にどうしたものか、と考えた。

それは女が着用している服の所為でもある。
俺と同じ高校の制服なのだ。

「ありが漬されそうだったから助けただけだ。」

俺がそう言つと、吹き出す女子生徒。

「ってそれ嘘でしょ!？」

「嘘に決まってるだろ?」

「何で嘘つくのよ!」

「お前がウザいだけだけど?」

「サラリと言うな!」

俺は会話が終了するまでに家に着きそうだったので、「ここいらで本気でこの女を拒絶しにかかる。」

「理由が聞きたいって言ったか…?」

「うん!」

「死にたかったからだ。」

俺がマジトーンで言うと、一気に俺の周りの温度が変わった様だった。

「何で…?何で死にたいの?」

「…:…じゃあ、俺も聞くぞ?何でお前にそんな事を言わなくちゃならないんだ?」

「た。」

「た?」

「助けたから!」

「…:結構自分勝手な奴だな。もう俺家に着くから、じゃあ、助けてくれてありがとな。」

一応再度礼の言葉を言うと、右に曲がり家を目指して歩き始める。

「明日君の事探すからな!」

後ろの方で精神錯乱者の声が聞こえた様な気がしたが、文字通り気のせいだろう。

俺は住宅街で何回か右折左折を繰り返して自宅を目指した。

第二話

俺は少し…いや、かなり他の人と違う…。

俺は左右で色の違う両目を持っている。

右が黒で、左が灰色の眼。

これは虹彩異色症という病気で昔から左の視力が右と比べても、大きく違いがあった。

虹彩異色症はその稀な発症性で珍しく思われたりする事が多々ある。だが、俺のは両方で大きく視力が違うというオマケ付き。いわゆるガチャ眼だ。

翠や蒼などの明るい色ではなく、灰色の瞳を持つ俺は中学時代からあまり、いい思い出がなかった。

高校からコンタクトに変えたが、これがばれてないだけでした。

医者には月に何回か行き、治療を施してもらったりしているので、斜視にはならないですんでいる。

因みに医者が目を丸くさせた俺の視力は右が2・0、左が4・5以上だ。

俺は今、生徒たちの声で騒がしい教室に身をおいている。

顔には絆創膏や、シップを付けており、その様はさながら、ボクサーの様だ。

俺は一人で、本のページをペラペラとめくりながら、教室の雰囲気をついていた。

皆一様に、俺を避けているのがわかる。当たり前だ。

俺と関係を持ったら、この学校の上級生に絡まれるのは目に見えてる。

それもこれも俺は全く悪くないと思うが。

俺は他県の中学からこの高校に入学した。

他の奴らと違い、中学が同じだったと言う奴は一人もいないと言う

事だ。

まあ、中学の時も避けられていた俺はあまり気にしていなかった。俺が上級生に絡まれているのは、部活動見学の時に犯した、ある一件が関係している。

部活に入れば少しは友達ができると思っていた俺は、まず、柔道部の見学に行く事にした。

タツパもある俺は中学の時、校外で柔道の道場に通っていたからだ。そして、柔道部を見ていると、柔道部の素行が悪そうな上級生が実際に組手をする、と言って俺を指名したのだ。

結果は俺の一本勝ち。

当たり前だ。その柔道部の先輩は勢いだけで型が全くなっていなかった。

その一件で俺は上級生に目を付けられたのだ。

その日から俺は殴られ蹴られの日々が続いた。

別に俺は我慢できた。

死にたかったのは別の理由だ。

そう、つまらなかった…

頭は平凡、運動神経は悪くはないと思っているが、そんなに突出している訳では無い。

趣味もあまりない。得意な事も……。

なのに、俺にはこの目がある。

忌々しいこの目が……。

嫌だった。凡人で終わるのが…。果てしなくつまらない。

俺は生きる理由が分からなかった。

だから、白線を越えた。

俺は一人ため息を吐いて、教室の窓を見る。

窓に立っていた女子生徒が俺の視線を避ける様に別の場所に移動したのが分かる。

どれくらいそうしていただろうか、耳に昨日聞いた声が届く。

「ヘイ！死にたがりな少年！」

随分と迷惑な名称で俺を呼ぶのは、昨日一番俺をムカつかせた女子生徒だ。

「ほら！ちよつと来て！」

教室に勝手に入って来て、俺の腕を掴むと引つ張る様に歩き出す女子生徒。

俺を無言で引きずられて行った。

教室のドアを開け放った空間から出る時、何故か浅川とピツタリ目が合った。

浅川は俺からプイと目を逸らすと、話していた友達と向き直る。

とうとう浅川の姿も、教室の全容も見れなくなった頃、女子生徒はようやく俺の手から自分の手を離れた。

「よし！第一回、自殺少年更生大作戦！」

女子生徒は俺を人気のない、屋上に連れて来ると、そんな舐めたような事を言う。

「おい…それより、何で俺をこんなところに連れて来やがった…？」

「聞きたい？」

「ああ…」

「君の自殺願望を払拭するため！」

「ああ…？」

「君の心を幸せにして、自殺を出来なくしてやるつという取り組みだ！」

「じゃあな…」

そう言っつて俺は屋上から帰るためにドアを目指す。

「チヨイ待ち！」

必死に俺を止めようとする女子生徒だが、いかんせん体格差があり過ぎる。

今度は女子生徒が引きずられる様な描写になる。

「ちょっと待ってっつてば！お願い、待って！お姉さんがジューズ奢るから！」

(何がお姉さんだか……。)
上履きの色で俺とこの女が同級生だという事は、もうわかっている。

「待ってくれないと泣くよ!？」

「は?」

「泣くっつて言っつてんの!」

「あゝはい、勝手にしてください。」

「もう!」

女子生徒は尚も食い下がる。

いい加減しつこかった俺はこの場は妥協する事にした。

「わかったよ………で?」

「よくぞ聞いてくれました!まず第一弾プロジェクト!反撃!」

女子生徒がそう言っつと、タイミングを見計らっつていた様に開く屋上のドア。

入っつて来たのはお馴染みの上級生たち。

「君の事を調べさせてもらってね。手紙で呼びました 果たし状っぽく」

擬音が聞こえそうな程ハッピーな感じで言う女子生徒。

「おい！俺とやりてーんだってな！舐めた事しやがって！殺す！」

上級生のキレ様を見るとどんな手紙を送ったのか、容易に想像できた。

「頑張れば勝てるよ！ファイト！」

このクソ女が……。

もうブチぎれたぜ……。

いいだろう…このクソどもは俺へのサンドバックって事で良いんだよな？

そうだよ…俺は何を考えていた。

こいつらが俺を殴ってきたのを何故我慢していた。

こんな弱つちい奴等の攻撃をもらいまくって……

殺す？俺を？

その前に俺がてめえをぶち殺してやる。

「おらあ！なんとか言えよ！」

全部で三人か…いつもは五人いたが…二人足りないな…まあいい。上級生の一人が俺の胸ぐらを掴んでくる。

「おら！そんなに死にてーなら、殺つ…ぺゃ」

頭突きを思い切り、ぶちかましてやった。

鼻を抑える間もなく気絶する上級生（A）。そのまま後ろにいる仲間、（B）に掴みかかり、押し倒して、マウントを取ると、殴って殴って殴りまくる。手にヌルリとした血液の感触がするが、気にする事なく殴り続ける。それこそ殺す気で。

流石に俺の様子に引いたのか、（C）は駆け足で屋上を逃げていった。

其れでも尚殴り続ける。

たまにパキと歯が折れたような音がするが、そのまま眼球や、頬、鼻を見境なく殴る。

もう気絶したと思い、俺は立ち上がる。

無言で俺を見る女子生徒。

「何だよ…?」

「いや、過激だなあとと思って…」

「お前がやれって言ったんだろ? 望み通り、反撃してやったが…?」

俺がそう言つと、ティッシュを取り出して、俺に渡す女子生徒。

俺はそれで血液をふき取ると、屋上を出るために歩き出す。

「待って。明日、昼休みに三組行くからね?」

女子生徒は俺のクラスを提示する。

俺はそれに応えず、階段を無言でおりて行った。

第三話

腕で作った枕が俺の睡眠欲を促進させる。

そのまま、時間を過ごしていると、俺の席の隣に人が立ったのが分かる。

「ねえ…藤原君…」

浅川の透き通るような声が俺の耳に届く事で、意識が少し覚醒する。それと、藤原ふじわらの 薙人なひとは俺の名前だ。

「何？」

「いや、その…」

「ん？」

「あのさ…昨日、クラスに来た子と藤原君ってどついつ関係なの…？」

これはあの女子生徒の事を言ってるのだろうか？

「知り合いかな？」

「…そうなんだ…」

俺が言うとニコニコし始める浅川。

人気があるだけあって、その笑顔はかなりの眩しさがあった。

「ああ。」

俺と浅川が何も話さないでいると途端にドアの方から聞こえる声。

「少年〜？迎えに来たぞ〜？」

俺は少しため息を吐くと、廊下で待っている女子生徒の元に歩いて行く。

「で？今日は何だよ？」

苛立ちを隠さない様に問いかける。

「だから〜昼。一緒に食べよ？」

「はあ？お前は俺の彼女か？」

「べ、別に彼女ではないですよ！？はい！違いますよ！？断じて！」

いきなり敬語になった女子生徒に訝しみながらも、俺は待ってる、
と言うと、机の横に掛けてある鞆から袋を取り出す。

どうせ行かなかったら騒ぐだろうから、俺は逆らう事なく従う。

「では、出発〜。」

俺と女子生徒はベンチのあるロータリーに向かう。

その途中ですれちがった生徒が俺達の事を見ていた様な気がするが、俺は気にせず歩を進める。

ロータリーに着くと、食堂があるこの高校、ならではの静けさがあった。

「何で昼一緒に食わなきゃいけないんだ？」

今更その質問をする俺。

「第二プロジェクト。あたしが友達になってあげよう！」

胸を張りながら意味の分からん事を公言する、女子生徒。

「って事で、よろしく！…えっと、そうだよ！名前！言っただけでなかった！あたしは咲田美希！君の名前は！？」

「藤原薙人…。」

「へえ…薙人ね…OKよろしく薙人！」

「いきなり呼び捨てかよ…あ〜うん。よろしく、美希。」

容姿について、説明しておく。
茶色の髪をボブカットにしており、顔は今更だがかなり、整っている。

だが、浅川の可愛いさと比べると、浅川が清楚な感じだとすると、咲田は活発な感じの可愛さだ。

咲田美希…。

これが俺が三年ぶりに出来た友達の名前だった。

。

。

。

家に帰ると俺は制服を脱いで、一階のベランダで音楽を聞きながら夕日を見ていた。

テレビなどより、俺はこっちのほうが好きだった。

沈みゆく夕日にふけていたら、俺は何か、庭の隅っこで光ったのが分かった。

俺は何も考えずにその光に惹かれる様に、その一点に向かった。

すると、何かの光沢を放つ箱の角が、地面から露出している事が分かった。

別に放っておいてもよかったのだが、何故か、そんな気になれなかった。

俺は大きめのスコップを持って来ると、そこを掘り始めた。

。
。
。

あたりが暗くなって来ると、ようやく箱を取り出す事が出来た。それは鈍い光沢を放つ、大きな黒い箱だった。

（何だこれ？）

意外に重い箱を俺は躊躇しながらも開ける事にする。

だが、予想以上に硬く、片手では開けられず両手で、思い切り開けにかかる。

するとカポン！という音が鳴り響き、俺の体が支えを失って、後ろに飛ぶ。

（痛っ？）

頭をしたたかにぶつけた事で、クラクラするが、めげずに大箱の中身を確認する。

すると、中に入ったのは…

黒いリストバンドの様な物だった。

だが、材質は布ではなくメタリックな鉄で高級そうな雰囲気を出している。

横にボタンがついており、何故かとてもそそられた。

（誰のだ？）

こんなところに箱を埋めとくやつなどいないと思うが…。

この家は今年の春建てられたばかりであり、このような物が見つかったも不思議ではないが。

俺は穴を埋め立てると、リストバンドの他にも色々が入っている黒い箱を持ち、部屋へと戻った。

第四話

昨日庭で見つけた謎の箱。

暇だったので、それを俺は部屋に持ち帰り、家族にも聞いてみたのだが、うちの一家の人は誰も知らないという事らしい。

因みにあの黒箱の中には他にも色々な物があった。

電池の来れた真っ黒の端末機のようなもの。

真っ黒のネックレス。

真っ黒のコートや真っ黒の機械的な手袋？みたいな奴。と言っても布ではなくメタリックな素材の物だから、手袋とは言わないかもしれない。

どうしてか、真っ黒率が果てしなく高かった。

そして、学校に向かう前の少量の時間、俺は今黒いリストバンドの様な物を前に思案している。

(いったいなんなんだこれ？)

普通はそう思うだろう。家の庭からいきなり変な物が出て来たのだから。何故か手放せない様な感覚で、部屋に置いてしまっているが、実際は奇妙な物だ。

俺は何も気にせず、リストバンドを気軽に手首につけてみた。最初から円が開いておりそれを腕に引っ掛けると、パチンと音を立てて装着する。

リストバンドはその幅の部分が意外に太めで、左右横にボタンが二つずつついている。

(ふ〜ん。でも、意外にかっこいいな…。)

黒のメタリックリストバンドは高級感を感じさせる光沢を放っており、腕につけ、装飾とするには少々違和感があった。

「薙ぐあたしもう行くけど？」

姉ちゃんが部屋の扉をノックもせずは無遠慮に開くと、律儀に弟に自分の出発時を示す。

姉ちゃんは今高校二年だが、違う高校だ。姉ちゃんは俺と比べると頭が良く、顔の造形も整っており、皆から嫌われる事のない性格も持っている。黒いロングヘアをサラサラと揺らしながら歩くその姿は正に”凜”の一言だ。

俺は姉の言葉に了解を示し、姉が部屋を出て行ったのを確認すると、俺も鞆に教科書を詰め込んでいく。

一通り準備が終わったのを見計らって俺は今更だが付けたリストバンドを外そうとする。

（あれ？）

そこで俺はある事に気づき、外そうとする力に増量を図る。

（外れない…？）

俺はそのまま奮闘していたが、結局時計を見ると、そのまま慌てて家を飛び出した。

ザワザワとしている教室に足を踏み入れると、違和感のある視線を皆から受けた。

たまに声量の調整を間違っている奴が、「あいつが二年の島本先輩ボコったの?」とか言ってる所を見ると、ただただ自分でも冷めた目になっているのが分かった。

俺はそのまま、クラスメイトを気にせず真っ直ぐに自分の席へと向かって行く。

向かう途中で女子の、暴力的とか短気とかの声が耳に入り、一層俺はくだらないと思った。

「おはよう。藤原くん。」

本当にこの女は何なのだろうか?と俺は少々わけの分からない女子生徒に苛立ちを覚えながら、そちらを向くこともなく言葉を返す。

「うん。おはよう。」

俺のいつもと違う雰囲気があったのか、浅川は少しオロオロしている様だった。

何故だろうか?俺とこの女は別に友達でも何でもなく、ただのクラスメイトだ。俺としてはクラスメイトは顔見知り知り合い未満である。

別に俺の事など気にせず、とつとあつちへ行けばいいものを。

若干考えに、あつちに行け。という様な雰囲気があったのは別に間違いではないだろう。

俺がそんな事を考えていると、浅川はまた、その小さめの声で喋り始める。

「そういえばさ……聞いた話んだけど……藤原くんが上級生の人と喧嘩したって……。嘘だよ。藤原くん、本当に優しいもん。」

「したけど?」

何を期待してるのか知らんが、この女の物言いは俺に何の興味も持たすことはなかった。

「何で…？それでも理由があるんだよね？」

聞いて来た事には答えたのにしつこく全容を知ろうとする浅川に俺は少しキレてしまった。

「あのさあ。お前何なんだ？お前になんの関係があんだよ？無理に話しかけてんならもうやめろ。…他の奴らを見るよ。誰も俺に近づかねーだろ？…あっちの奴らとクソ下らねー話でもして笑いあつてりゃいいだろーが。」

そう言つて俺はまだ騒がしさの残る教室をイライラしながら出ていった。

その日は熱もないのに、保健室ですつと寝ていたと思う。まあ、咲田が来たから暇を持って余す事は無かった…。

俺は本当に学校が嫌になっていた。帰りたかったが、親に心配はかけたくない。

その悪循環の中で悶える事で俺は苦痛を感じていたが、咲田の存在が少なからず俺を和ませているのは事実だった。

認めるのは少々癪だが…。

「そういえばさあ、さっき変な事があつただけだ。」

「変な事？」

「うん。教室に言つてあんたの事を探したんだけど、いないじゃん

？それで、浅川さんだっけ？に聞いたの。」

普通に俺の事を聞けてしまうから、結構こいつは肝が据わっていると思う。

「で？」

「いや、驚いたよ。いきなり泣き出しちゃってさ。わけが分からな
いってんで、理由を聞いたら、ゴメンなさいって言って走って逃げ
ちゃってさ。」

俺は見舞いのお菓子を食いながらそれを不思議だなぁと言いなが
ら聞いていた。

「てかお前授業いいの？」

今は五時間目の最終授業だ。

「おk。別に授業なんて聞いてなくても点数とれるし。」

それより聞きたかったのは咲田は何故、授業を放棄してまで俺の
こに来たのか。という事なんだが。

タケノコの里をサクサク音を立てながら食いなら咲田は言った。

「てか、何で保健室で寝てんの？熱あんの？」

「いや、だるかっただけだ。」

「不良だね？」

「不良だったら律儀に保健室で寝ねーだろ？」

俺が言つと、それもそうだ。と言いながら咲田は少し笑った。

「なあ、美希。」

「ん？」

「お前俺の事好きか？」

「ツー!?……………嫌いじゃないですよ?いやマジで?」

「やっぱいいや。聞かなかつた事にしてくれ。」

「あーうん。……………籬人さんはどうなんでしょう?」

「は?てか何でさん付け?」

「私の事が好きでございましょうか?」

その質問は俺の心理を突くものだった。

「好きがどこからなのか分からんけど……………まあ、好きなんじゃね?」

俺が言うと、体は前を向いたまま、顔だけを逸らす美希。

「どうした?」

「いえ、なんでもございませんですよ?」

「何でこっち見ねーの?」

「首が疲れるからです。」

「そっちの方が疲れるだろ?」

「……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1443z/>

white line

2011年12月8日00時46分発行